



ごっこなのです。たとえば「鬼の居ぬ間に洗濯じゃぶじゃぶ」とか、「鬼さんこちら手のなる方へ」と、鬼をからかったり、反対に鬼の方からおどしたりからかったりすることはもあって、長い年月の間子ども間に人気の変わらぬ遊戯の一つとなって、今では百種以上の鬼あそびがあります。

では、鬼ごっこのものと鬼祭りとはどんなお祭りなのでしょう。鬼祭りというのは、全国の神社や仏閣で行われている鬼追いの信仰行事で、京都の吉田神社や福岡県太宰府天満宮の鬼燻祭り、仏寺では、京都盧山寺の鬼の法楽などが有名です。いずれも神様の功績を讃える演劇で、悪鬼は僧侶の加持祈禱によって調伏されます。すると今度は悪鬼は人々に祝福を与える鬼に変身してしまうのです。このように鬼には、邪悪なものとして追い払われる面と、異界から訪れて祝福を与えるという二つの面があると信じられてきました。

私たちの生活のなかで、鬼の出てくる、身近な今も行われている行事には、節分の鬼やらいがあります。節分

というのは、一年のうちの立春、立夏、立秋、立冬は、いずれも季節が改まるときの、分けめのことなのです。

けれども立春の春だけをとくに重くみるようになったのは、旧暦では、立春から新しい年がはじまり、節分は一年の最後の日、大晦日となるからで、この大晦日の除夜には、疫鬼を追い払う追儺の式が行われていました。

追儺の習俗は中国から入ったもので、文武天皇の慶雲三年（七〇六年）に疫病が流行し、百姓が多く死んだために鬼やらいの式が行われ、のち恒例の年中行事となったのは、文徳天皇齊衡元年（八五四年）以降といわれます。

その式法は「延喜式」によると、大舍人寮の舍人が鬼となり、舍人長の演ずる方相氏が黄金四目の仮面をかぶり、玄衣朱裳を着て右手に戈、左手に楯をもち、舍人長に従う振子という八名の児童は、桃弓、革箭、桃枝を持って、それぞれが鬼を打つのです。この所作が鬼ごっこにまねられているわけです。

追儺の鬼になる家は、鬼株とか鬼講などといって、特

定の家が定まっていました。悪鬼といえども鬼の役をつとめるときには、シオゴリ（汐垢離）をとって身心の潔齋をしなければなりません。

これらの除夜の追儺は、寺院の修正会などに行われるようになり、やがて民間にも福を招き鬼を追い払うという意義をひろめるようになりました。

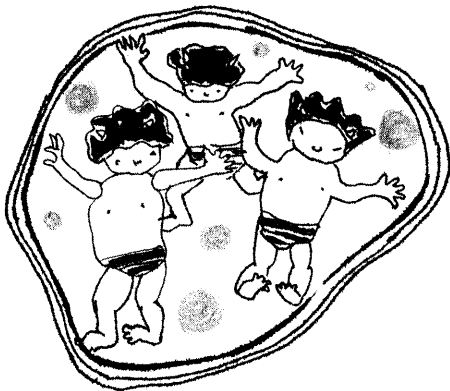
日本には春のはじめに神が訪れて、人々に祝福をもたらすという信仰が古くからあって、その神を家に迎えて祭るために、ハライをする必要があったのです。この神を迎えることと、災厄を除くことが習合して、悪鬼をはらう行事の方が成長してゆきました。

節分の鬼やらいは、鬼打ちなどといって、災厄をもたらす精霊としての鬼を追い払い、豆で鬼の目玉をつぶすというのです。

鬼ごっこの他、子どもの世界には、昔話のなかで、桃太郎の鬼退治や、丹波の大江山の鬼など、たくさんの鬼の出でくる話に出合います。

鬼についての伝承は、時代により地域によってさまざま

まですが、海の向こうの中国では鬼とは死者の魂を意味し、「鬼は帰なり」といって魂の帰ってきた形を表わすものでした。日本でもこの世に恨みを残して死んだ人の場合には、鬼とか天狗になると考えられていました。



「倭名類聚鈔」(承平年間)によると、鬼は隠おぼがなまったもので、姿がかくれて見えない、「ものにかくれて」存在するのが鬼の性格といわれます。

日本の鬼の観念は、時代によってうつり変わっていますけれども、古くは怖ろしい形相をして人を食う怪物と想像されていました。その後、仏教や陰陽道の影響をうけて、人間生活をおびやかす思想上の怪物として擬人化されてゆきます。

身の丈は二・七m、髪は夜叉のように逆立ち、ひたいには牛の角がはえ、目は猿のよう、口角は大きく裂けて虎の牙をもち、肌は赤黒くて、人間と同じように体には動物のような毛ははえておらず、腰には虎の毛皮のふんどしをまとい、怪力をもっているけれども、ものは言わないといえます。

風神や雷神も古くから鬼の形相でとらえられていますから、荒ぶる神と同類の超人的な精霊ともいえます。目一つ鬼など奇形的な像のイメージでとらえられています。

昔話の中に登場する鬼は多く、みなこのような怖ろしい怪物で、深い山の奥とか海のむこうの島など、われわれと若干の距離をおいたところに鬼は住むと語られてきました。

島国の日本は山地が多く、その山奥では、古来伝承されている山の神の異様な形相や、山人の強い力とか、さらに山岳修行の修験者の神秘などが加わり、また仏教の地獄の観念と習合して、「鬼に金棒」という金棒を持って死者を追う地獄絵のような鬼の姿が描かれています。

丹波の国大江山の「酒呑童子しゅんどうじ」は、奥山に住む鬼共の大將で、都(京都)に出では人を食ったりあばれまわっていたのを、源頼光やその家来、渡辺綱、坂田金時などが退治する話で、南北朝～室町時代に多く作られた怪物退治の代表作です。

「二人兄弟」とか「千里の靴」という昔話では、貧しい母親が三人の子どもを育てかねて、子どもたちを山奥に捨ててしまいます。捨てられた三人の子のうち、弟が

兄たちをばげまして、山の中の灯を目あてにたどっていきくと、そこは鬼の家でした。鬼の家にはお婆さんが一人るす番をしていますが、親に捨てられた子どもたちをかわいそうに思って、三人をふるの中にかくしてくれました。まもなく鬼が帰ってきて、なんだか「人くさい」といいますが、「今逃げていったからだ」とだますと、「それじゃあ」と鬼は千里の靴をはいて探しに出かけます。けれども見つからず、疲れて帰り眠ってしまいます。その間に弟は千里の靴を奪い、兄たちを背負って逃げ、無事に家に帰るといふ話です。同様な話は山梨県や鹿児島県奄美大島、喜界島などにもあります。

一方、海上の孤島の鬼のすみか、鬼が島の場合には、それが財宝にみちた常世の国とか、蓬萊の島という観念を習合した結果、鬼征伐に行った桃太郎は、金銀さんごを車につんで帰るといふことになります。

「桃太郎」や「一寸法師」は、ふしぎな誕生と奇瑞を説く話で、主人公の偉業としての鬼退治は、代表的なモチーフ「桃太郎の事業」となっています。

また危難の克服を説く「三枚のお札」では、護り札が主人公の危難を救う話で、鬼婆に追いかけられた小僧が「山出る」、「川出る」などと唱えながら背後にお札を一枚ずつ投げると、にわかには山や川や火があらわれて、鬼婆の追跡をさえぎり、小僧は無事に逃げることができると話です。お札の御利益はこの他岩とか海、砂山、茨の藪、剣の山などを出現させる場合もあります。

「鬼の子小綱」は、鬼にさらわれた女性を助け出すという厄難克服の話で、娘が鬼にさらわれたのを爺が探しにゆき、鬼の子の手引きで鬼の家に着き、隠れていると鬼が帰ってきて「人臭い」といい見つかってしまいます。娘と鬼の子の気転で危機をのがれ、すきを見て船で逃げます。追いかけてきた鬼は、海水をぐんぐん飲んで船を吸い寄せます。あわや一呑みに吞まれようとしたとき、鬼の子がとっさに娘の尻をまくり、杓子で尻をべたべたと叩くと、鬼は笑いだして海水を吐きだしたので無事に逃げ帰ることができました。女性性器のもつ邪悪をさえぎる力と、呪具としての杓子の力に依ったものと考え

えられます。脱出に重要な役割を果たす鬼の子は、半人半鬼ともいえるもので注目すべき存在です。

また「鬼をひとくち」という「和尚と化物」とも呼ばれる話は、和尚と鬼が化けくらべをして、鬼が小さなものに化けたときに、和尚がそれを一口に食べてしまうという話です。人に崇敬と畏怖の念をもって祀られる神が、その畏怖のゆえに鬼とも呼ばれ、仏者と術くらべをして破れていく様子には、中世以来神々の落魄してゆく姿がみられます。この話には、鬼をも一口で征服する和尚をたたえるときも、鬼としての神々の威力が失われて後退していくさまが、多分に笑話化されています。

人が鬼になる、または鬼という名のもとに行為することが、魅力的な説話伝承の一分野を形成していることは、注目すべき庶民精神史の問題といえましょう。

疾風迅雷のような鬼の行動性は、盗賊集団のイメージを重ね、天狗は山伏の貌と重なり、激しい女の情念は鬼女への変身を求めて、般若の貌へと変わる面をもっていることなどが、「目に見えぬ」世界の鬼の存在を大きく

変化させてゆきました。

鬼には邪悪なものとして追ひ払われる面と異界から訪れて祝福を与えるという二面性があることは、次の伝承にもみられます。

群馬県前橋付近で、二月八日のオコトの日には赤城山から鬼が来るといいます。その鬼は庭先に立てる目かごを上向きにしておけば、お金を入れて行ってくれるというのです。鬼は怖ろしいばかりでなく、ユーモラスな面ももっているようです。

(日本民俗学会会員)